

「長野先生・長谷川先生のドイツセミナー紀行」

2016. 11. 09～16

長野式臨床研究会 副代表 長谷川吾朗

晩秋のころ、長野式臨床研究会の代表長野康司と長谷川吾朗は長野式治療を伝えるためにドイツのミュンヘンまで飛んだ。

事の経緯は5年前のフランクフルトで開催された「日独交流 150 周年」での鍼灸合同セミナーまで遡る。この時、長野先生が行った長野式セミナーが好評で、終わった後に「長野式治療を学びたい。」「日本で研修できるのか?」、「本は出ているのか?」など、長野式治療に多くの賛同者が現れた。23 名の出席者のうち半数が医師。主催者はそれでまた「長野式」をやりたい、今度は単独でという事となった。

ところが、一昨年別のドイツの企画者からの繋がりで、直前まで決まっていたドイツセミナーが急きょ中止となりました。その後長野式治療を、池田イゾルデさん（フランクフルトセミナーの時の通訳者）は最初から高く評価して、渡独の機会を伺っていました。

時が熟し今回のドイツセミナーは、「日独ソリューションズ」代表のキーファー・池田イゾルデさんの企画で、ご夫君の池田信雄東大名誉教授が陰で支え、お二人の住むバーデン・ヴュルテンベルク州オーバーシュバーベン地方にあるヨルダンバートで実現の運びとなった。

日本時間 2016 年 11 月 9 日 12 時 40 分の全日空でドイツミュンヘンに向かい飛び立つと、日本との時差マイナス 8 時間、その日の夕方 16 時 55 分ミュンヘン空港に到着。池田夫妻の出迎えを受ける。いよいよ「長野式治療 in ドイツ」のスタートである。



ドイツ初日 11/10

① 治療院見学

朝食を済ますと、池田夫妻が迎えに来た。当初は予定に無かったビーベラッハ市にある「ハイト治療院」への見学だ。車で 20 分位走った古い街の中心にこの治療院はある。歴史ある建物の中に入っていくと、ハイト先生が快く出迎えてくれた。

早速、治療風景を見学させていただいた。この治療院では、主に鍼治療と漢方薬を使い治療をするらしい。奥様は中国で勉強された治療を元に施術をし、ご主人は多くのセミナーを受けて多彩な治療をこなすという。（日本の鍼灸は全く知らないらしい）



この時は3人の治療の様子を見ることができた。「お灸は使いますか？」の質問に対し、「直灸は痕が残るので使いません。温灸のみです。」とあって温灸治療の患者さんの元に案内してくれた。ドイツでのお灸は、時に訴訟問題が起きることもあるらしいので使わない事が一般的だ。



②難症患者の治療

治療院見学の後ホテルに帰り、3時間ほどゆっくりしたのち、患者さんが待っているとの連絡が。この治療も当初の予定にはなかったものだ。渡独の直前、長野先生のもとに一人治療してほしいとの依頼があったからだ。一度はお断りしたが、たつての願いで治療することとなった。

この時、ベルリン在住の鍼灸師の高橋たけし先生が、専門的な分野の通訳として合流した。ホテルに併設されている治療室を使っでの治療となる。

患者はオーストリア、ブルーデンツ市在住の女性。12年前から足の動き（特に左が強い）が悪くなり、歩行困難で日常生活もままならないと訴える。病院数か所であらゆる検査をしたがALSでも自己免疫疾患でもない、全く原因不明と言われる。



早速所見を取る

「脉状」 やや数やや滑、

「腹診」 腹部膨満感、

「火穴」 行間 (+)、

「局所」 貫経張っている、肩井 (やや+)、天牖 (やや+)、胸鎖乳突筋 (左+)、百会 (+)。

これらの所見情報を元に

「扁桃処置」「貫の気3点処置」「肝気水穴処置」「筋緊張緩和処置」「頭部瘀血処置」「滯脈」。

所見に沿った全身治療だ。



通訳のイゾルデさんと、高橋先生が、長野先生の言葉をつぶさに伝える。そして患者さんを連れてきたマイヤー氏も聞き耳を立てて、必死に覚えていく。息の合った実際の治療がここにあった。治療後、立って動作の確認。治療前より足に力が入ると喜んで言った。



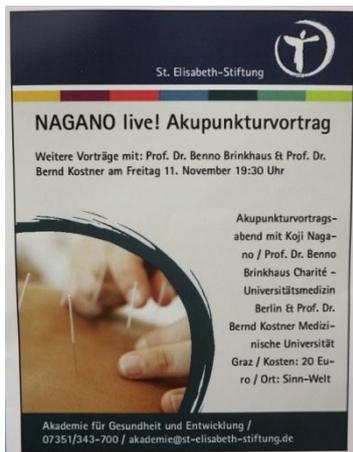
後日、この治療に立ち会ったマイヤー氏は、自分の治療院で色々な患者さんに「滯脈」を使ってみたという。結果患者さんの頸が軽く回って、患者さんも、マイヤー氏もビックリ。長野式治療に感動したと喜びを報告に来た。

ドイツ2日目 11/11

今日は夕方までゆっくりできる。ホテルに併設されているスパでゆっくりした後に、高橋先生とセミナーの流れと通訳の打ち合わせ。思いの外大変だという実感が湧いてきた。

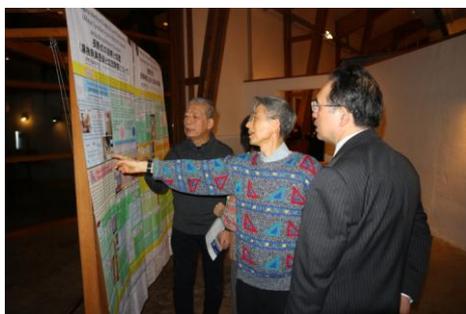


③ ジョイントセッション



いよいよ本番です。ベルリン大学医学部東洋医学部門のベンノー・ブリンクハウス教授と、オーストリア、グラーツ医科大学講師のベルント・コストナー博士も夕方には合流。

ジョイントセッションの前には、11/5.6に開催された「世界鍼灸学会 WFAS」のポスター（大野倫史氏、岩島慎吾氏の製作）も披露、注目の的となった。



熱い熱いトークに参加者は釘づけとなった。



長野式臨床研究会

長野康司先生



ベルリン大学医学部東洋医学部

ベンノー・ブリンクハウス教授



グラーツ医科大学

ベルント・コストナー博士

ジョイントセッションの後には、恒例の打ち上げが催されたが、長野先生は大分神経を使った様子、明日の本番に備えて早々に自室で休息。



左からボン在住の亀山富美加氏、通訳池田イゾルデ氏、東京大学の池田信雄名誉教授、長谷川吾朗、ベルリン大学のベンノー・ブリンクハウス教授、グラーツ医科大学のベルント・コストナー博士

④長野式セミナー初日

Akademie für Gesundheit und Entwicklung
St. Elisabeth-Stiftung

Nagano-Methode

Meisterkurs der Nagano-Akupunkturschule mit Kōji Nagano

Weitere Vorträge mit:
Prof. Dr. Bernd Brinkhaus
Charité-Universitätsmedizin Berlin
Prof. Dr. Bernd Koester
Medizinische Universität Graz

11. - 13. November 2016
Sinn-Welt im Jordanbad

Kursleitung

Kōji Nagano
ist Leiter einer Akupunktur-Praxis in der Stadt Oita, Japan. Im Jahre 1980 legte er das Examen zum lizenzierten Meister in Akupunktur und Moxibustion am Tokyo College of Medico-Pharmaceutical Technology ab. 1989 gründete er die School of Nagano Style Acupuncture Clinical Approaches, die inzwischen in zehn Städten in Japan (u. a. in Tokyo, Osaka, Nagoya, Sapporo, Fukuoka) sowie in São Paulo, Brasilien, Zwingstetten unterhält und dort Fortbildungseminare zur Nagano-Akupunkturmethode durchführt. Seit 1998 publiziert Kōji Nagano in der medizinischen Fachzeitschrift Médecinepoint. Im September 2015 erschien sein Buch „Die Behandlungswegweise der Nagano-Methode für jedermann verständlich“, das in der Rubrik „Fachbücher bei Amazon sofort auf Platz eins aufrückte.“

Goro Hasegawa
ist der Leiter der Akupunkturpraxis Hasegawa in Oita, Japan, die er 1999 gründete. Seit dieser Zeit spezialisiert er sich auf die Nagano-Akupunktur und fungiert seit 2002 als Leiter von Nagano-Akupunktur-Meisterkursen, die er auch außerhalb Japans, u. a. in Australien und Portugal durchführt.

いよいよ「長野式セミナー in ドイツ」のスタート。会場は昨夜の「ジョイントセッション」の会場。広い空間のあるとても開放的な会場に緊張の糸も緩む。



午前には長野先生のセミナー「長野式診断法」から「免疫系」へと進んでいく。参加者は 15 名（医師は 9 名）、皆真剣なまなざしで長野先生の指先を見つめる。

時折、いくつもの質問が飛び交うが、二人の通訳の絶妙なコンビでセミナーは進む。



午後には長谷川吾朗のセミナー「神経・内分泌系」を楽しく伝え、長い一日が終わった。

⑤長野式セミナー二日目

二日目は会場がホテルの会議室に変更、昨日の会場は子供たちの体験教室に変わったためである。この日も熱い質問も多く、長野式治療に対する思いが込められていた。



午前中に長野先生の「気系」のセミナーと長谷川吾朗の「筋肉系」のセミナー。初日とは打って変わって、会場の空気にも溶け込んだ参加者は、笑いも交えて雰囲気も最高潮になっていく。



午後には、長野先生が実際の治療を二人のモデルで行う。ドイツではホワイトボードは使わず、大きな半紙をめくり上げて書くタイプが主流なようだ。

モデル治療一人目

「主訴」肩の強張り、

「脈状」やや数やや緊、

「腹診」右中注 (+)、

「火穴診」右勞宮 (+)、

「局所診」左天牖 (+)、右肩井 (+)。

この所見により「扁桃処置」「瘀血処置」「血流の為に内関」「帯脈処置」「局所に切皮瀉」を選択。ボードに書き込み、高橋先生にドイツ語訳で記入してもらおうスタイルをとった。



全てのセミナーが終わった。参加者の一人の医師がもっと勉強したいと口火を切ると、他にもどんどん次回開催を祈願してきた。「今度は日本に行ってもっと沢山教わりたい。」「私も！」「私も！」

最後に全員で記念撮影、そして日本の「三本締め」を教えて、全員で「ちゃちゃちゃ、ちゃちゃちゃ、ちゃちゃちゃっちゃ！」大盛況で幕を閉じた「長野式治療 in ドイツ」でした。



セミナー後に関係者が集まり「最後の晚餐」、ドイツでのセミナーの成果を語り合いました。

しかし、このあと長谷川は「腹診」の余波でダウン、ビールや料理もそこそこに一人部屋に戻りました。(涙)



ドイツ 5日目 11/14

セミナーの余韻もかすかに残り、5日間滞在したヨルダンバートを去る時が来た。朝食も非常に美味しく、毎日の活力をいただきました。これからミュンヘンに向けて出発します。



⑥初日に診た患者さんを再度治療の為ケンプテン市に立ち寄る

ミュンヘンに帰る途中、初日に治療した患者さんを再度診るためにバイエルン州ケンプテン市にあるマイヤー氏の治療院に立ち寄ることになった。長野先生が、「帰りにもう一度診ましょう。」という事がきっかけだ。

治療の前に、地元の新聞社から取材を受けた。「日本から来た鍼灸師が患者を治療」みたいな内容だろうか。後日掲載記事をメールで送ってくれるそうである。



治療はすぐに始まった。彼女が言うには前回の治療で体の症状がはっきりしてきた、こんな事は今までにないという。身体の状態は前よりいい。

所見は

「脉状」貫の気弱く、沈脉、

「腹診」左中注 (+)、左大巨 (+)、

「局所」左陰陵泉 (+)、両貫経狭い、左肩井 (+)、

「火穴診」左行間 (+)、左勞宮 (+)、左胸鎖乳突筋 (やや+)、百会 (+)。

これらの所見から「扁桃処置」「貫の気3点処置」「貫盤鬱血処置」「左肝気水穴処置」「瘀血処置」「頭部瘀血処置」を処置に選択した。

前回と比べて処置はほぼ同じだが、明らかに体の硬さが緩んできている。治療後の彼女の笑顔が前回以上に明るく感じた。立って歩く様も前回よりいい、彼女は長野先生に抱き着き喜びをあらわにした。



彼女の治療を終え、一路ミュンヘンに向かう。外は11月だというのに昼間からマイナス2度、空気はグッと冷たく感じる。



⑦ミュンヘンに戻りクラシックコンサート

今回のドイツで治療以外の唯一の行事、ミュンヘンにあるガスタイクで催されるミュンヘン交響楽団の定期演奏会。ドボルザーク、ショパン、チャイコフスキーの迫力のある演奏に酔いしれた。恥ずかしながら、正式なクラシックコンサートに行ったことがなかったので、ノウハウを池田夫妻から教わった。

- ・今回のような少し軽めの公演は平服で良いが、特別な場合は正装が常識。
- ・奥の席の方が自分の前を通るときは、起立して通してあげるのがマナー。
- ・演奏中は、一切音を出してはならないし、会場の出入りもできない。
- ・クロークにコートを預け、受け取る時は早めの行動が渋滞を避ける。

池田夫妻は流石に慣れているので、一つ一つの行動にそつがない、あつという間にクロークでコートを受け取り後ろを見ると、長蛇の列。お見事。



ドイツ6日目 11/15

ドイツで最後の朝を迎えた、いよいよ帰国だ。飛行機の時間は夜の8時、本来なら空港までの時間はゆっくりミュンヘンの街の散策、美術館、お土産、あれこれ考えられた。しかし朝一番で、ミュンヘン大学医学部付属病院麻酔科及び学際ペインクリニックの医科長ドミニク・イルニツヒ博士より、当大学病院で長野式治療の実技を見せてほしいと正式に連絡が入った。ミュンヘン大学病院で少し長野式の話をしてほしいという希望は聞いていたが、実技まで見せてほしいというのは急な話だった。デモンストレーションの時間は午後1時、何とも中途半端な時間。この依頼に長野先生は、「行きましょう！」。



ミュンヘンのホテルで最後の朝食の後、ノイハウザー通りを駆け足で散策し、マリエン広場の新市庁舎を横目に眺めつついざミュンヘン大学に足を向けた。

⑧ミュンヘン大学医学部付属病院で長野式治療のデモンストレーション

ミュンヘン大学病院麻酔科及び学際ペインクリニックの入っている建物に着いた、歴史ある風貌の建物に入っていく。中は迷路のような感じで、目的のドミニク・イルニツヒ博士の待つ部屋までやっとの思いでたどり着く。



イルニツヒ博士は、日本の鍼灸治療にも詳しく、ドイツでも何冊か鍼灸関連の本も出しているという。今回、長野先生の「よくわかる長野式治療」の本をドイツ語訳したいという話も出たが、話の流れの事かどうかわかりませんが真意は不明。しかし長野式治療に非常に興味を持っているのは確かかなようだ。



いよいよ実技披露。緊張の中、教授、医師、医学生を取り巻く治療室に案内された。このアウェイ状態の中、長野先生はいつもと変わりなく、軽く長野式治療の説明をした後、治療に取り掛かる。



今回のモデルになるのは、59歳女性医師

「主訴」風邪の初期、昨夜から痰が絡む、

「既往歴」2001年腰椎ヘルニア（足には痛みはこない）、

「随伴症」左腰痛、夜中に熱くなり汗をかく、左肘痛（昔から）、

「薬」時々漢方薬を飲む（自分で処方）、

「脈状」やや数やや滑、

「腹診」右中注（+）、右大巨（+）、お腹が汗ばんでいる（緊張強い）、

「火穴診」右然谷 (+)、右勞宮 (+)、

「局所診」両陰陵泉 (やや+)、両肩井 (+)、左天牖 (+)、左胸鎖乳突筋 (緊張)。

これだけの所見から、「扁桃処置」「瘀血処置」「骨盤内鬱血処置」に処置法を決定し、いつものように治療が始まった。

当初、後方で姿勢も正しく遠巻きに見ていた医師らも、長野先生の治療が進むにつれだんだん前のめりになり、長野式治療とやらを見てやるぞという感じだったのが、これいいね、どうやっているのだろうか的な、興味をそそる治療を目の当たりにした輝く目が変わっていたのに気づいた。



治療後、途中まで何も言わなかったモデルの女性医師が、「頭がスッキリしてきた、気持ちがいい。」と笑顔を見せた。

治療の途中で何人かの医師は、「患者治療の為やむを得ず抜けます。」と後ろ髪をひかれる思いで「会場を抜けて申し訳ない。」と伝言を受けた。

これですべての日程、行事は終えた。無事にやり遂げたという高揚感と共に体の力がドッと抜けた長野先生でした。



日本語でメニューが出ていた「ミュンヘンレストラン・ハッカーハウス」でドイツ最後の食事、ビールも一段とうまい。



ドイツを終えて

今回のドイツでの長野式治療は、初日から最終日までスケジュールしっかり詰まり、旨みたっぷりのドイツビールのような非常に内容の濃いものとなり、今回の「長野式治療 in ドイツ」は大成功に終わった。

大功労者の長野先生も、ドイツでの成果に納得がいった様子、達成感は大きかった。

プロデューサー兼通訳の池田イゾルデさんのおかげで、お互いの意思疎通ができた、もしも彼女がいなければドイツセミナーは失敗に終わったといっても過言ではない。

そして、池田教授が陰で支えて、しっかりサポートして、今回の総監督として大活躍でした。

私、長谷川は、後方支援で、長野先生をしっかりサポート。ビールばかり飲んでいたようですが、役割は十分に果たしたと思っています。

この「長野式治療 in ドイツ」はこれで終わりではありません。池田教授も、「このドイツセミナーを今後も続けていきたい。私自身もじっくり長野式治療を見させていただいた。これは本物だ！まだまだドイツは長野式治療を待っている。」と言われた。来年には、「日独ソリューションズ」がドイツから日本への長野式鍼灸研修ツアーを企画するという。

今後の展望

今回のドイツセミナーで分かったものがいくつかあった。

- ・今までは、世界の鍼灸師の研修の場として、中国、韓国、アメリカが普通であった。これからは、世界から日本に呼び、鍼灸研鑽の場の準備をしていかななくてはならない。
- ・セミナーに必須な通訳。通訳次第でセミナーの良し悪しが決まるといっても過言ではない。
- ・テキストも、各国語に対応した、図や写真を多用したものの準備が必要。英語だけでは通じない国が多々ある。
- ・日本の鍼灸技術は、世界トップクラスだといっても過言ではない。WFAS でもあったように、繊細で美しい、これは世界が求めている。日本の鍼灸技術は、これからどんどん世界に出ていくことが必要である。各流派共に研鑽して、世界に飛び立って行きたい。

ミュンヘン大学のイルニツヒ博士がついこの前まで会長を務め、今でも理事会の要職にある「ドイツ鍼灸医師会 DÄGfA (デグファ)」(会員数 8000 人) が、長野式鍼灸に関心を示してくれていることも後押しの材料となってきている、今です。

今後、鍼灸技術の世界への伝承には、日本の国からの援助も欠かせない考える。外国人を観光客として日本に呼ぶだけではなく、色々な日本の伝統技術を世界に発信する必要がある。以前、国からの補助金で世界に鍼灸を広める方法は無いかと、外務省、厚生労働省等に伺いを立てたことがあった。通常の補助金制度では、太鼓の披露、漫画の拡散、刃物の紹介などには補助金制度が該当するという。しかし鍼灸技術は該当しなかった。なぜなら、「一部の鍼灸師だけの為の技術だから該当しません。」との返事でした。一部の鍼灸師が各国の患者さんを治していくというものです、立派な意義があると思います。

すでに、来年の秋に、早速日本に長野式治療研修をとドイツでは動き出した。世界の流れは動いている。世界は日本の鍼灸技術を確実に求めている。日本の鍼灸師はもっと自信をもって世界に羽ばたく時が来た。「WFAS 世界鍼灸学会 in つくば」をきっかけに、日本の鍼灸は次のステージへ進む準備が必要である。

「長野式治療ドイツに渡る」

企画「日独ソリューションズ」代表 池田イゾルデ

通訳 池田イゾルデ・高橋たけし

長野式治療講師 長野康司

講師・サポート長谷川吾朗

ドイツでのサポート 池田信雄

編集 長谷川吾朗